

京都竹豊座五月興行〈摘録〉

〈出典：浪花名物「浄瑠璃雑誌」大正6年5月〉

五月一日開場す前は菅原の通しにて切に御所桜を出し相変らず好人気なりし、評者多忙の為一日送りに延ばす内、十六日にて楽と聞き驚いて往て見れば、当日も矢張聴客は一杯話^{つまつ}て居るに何故仕舞うのかと聞けば、市会議員の選挙で世上が忙しいのと、^(マア)跡興行の都合有りとの話にて始めて合点が行った、閑話休題例の由良之助式で既に鳴門の道明寺で有った、故に聞洩^{ききもら}した分は略す

(中略)

■車先の段(南登) ■車場(松王、時▲梅王、海老▲桜丸、敷島▲杉王、春雄▲時平、筆)、皆相当出来て、屑も出さず、可なりお茶は濁せた■茶筌酒(三笠、大造)「春さきは在々の鋤鎌も楽々と」より「サアサア此方へと機嫌よう」迄、白太夫も随分苦心の程が見え概括評は上の部である■喧嘩場(筆、金吾)「コレ千代様」より「唾を吞込で」是も無難■桜丸腹切(時、弥七)「兄弟夫婦に」より当座開場以来毎回声を潰して居たりしが今回は寧ろ出過ぎて「頼みも力も落果て」は動もすれば新内節に近く「泣きやんな……アイアイアイ」多きに失す「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」の甲は毫も卑怯な語り方せず正面に繰る「無常の桜」受た、段切に終る、今回は時も少し男を上げた、冠四は白太夫を能く遣うて居たが松王を憎むの余り段切に態々松の木の傍へ往て杖を以て打擲するは臭いぞ臭いぞ■天拝山(海老、兵三)「君を思へば」より随分熱心に語り居れど、詞を含む癖有りて文句の明瞭を欠く所有り、殊に前の瀧みを受け暫時何を語るやら分らざりしが、牛の講釈にては聴客の耳を傾けしめた、漸次語り進むに随い是も相当発展した。相丞は辰五郎の早替り、祈りに成て色花火を焚き見物は大喜びなりし、総じて聴客の様子を見るに、浄瑠璃を聞く者が三分、人形を見る者が七分位の割方で有る。兵三は健腕なれど行儀が悪い、三味の棹と自分の頭とを一撥毎に振るは外観が悪く、体も疲れはせぬかと思う、気を付けぬと一代の癖に成る(大きに憚りさん) ■寺入(春次、新三郎)「一字千金二千金」より新進の花形揃い、太夫は立声にて立派な天品であるが、声の善き者は浄瑠璃は下手に相場が極って居る様じゃ、若し芸に熱心したら嶮然たる立物に成れるは請合の西瓜なれど、兎角師匠の真似のみに腐心する傾がある総じて真似をする者に、善い真似をする者はないと云うても差支はない、要するに師の善い所のみを採るが肝心で有る「アイ小太郎と申て」千代たるの情なし「下部」で送る、新三郎は筋はよいが男前が美過ぎて陰呑じゃ、リンリンの電話が多い様じゃが、何卒技芸一途に進みたいもので有る■寺子屋(春子、新左衛門)「どりやこちの子」より責任が重いから声を潰さぬ様工夫してよく長丁場物を語って居るが、菅四は太夫の畑で無いと感じた、少し声が痛んで居たので仮名送りも春子一流を充分發揮する事が出来なんだ、辰五郎の松王は立派、併し首実検で髪^{しん}の扱紙^{しごきかみ}を取て首を拭く型は如何だろうか、小兵吉の千代は余り踊らずによく動き紋太郎の源蔵も慥に使うた

●文楽座一月興行〈摘録〉

〈出典：浪花名物「浄瑠璃雑誌」大正7年2月〉

昨冬来小家に大修繕を加え、舞台棧敷を檜の白木造りとしたれば頓に面目を一新したり、外題は前が菅原伝授手習鑑大序より寺子屋迄、中に寿三番叟を挟み、切は歌祭文野崎村より道行を添え一月二日より蓋を開けたるが、其勢の素晴らしさ。扱は昨秋弥大夫の入座以来土が変りしかと思わる程の大入にて一寸近寄り兼ね漸く二十日目に入場するを得たり、記者一個の意見計りも面白く無いから他の批評家の言を参酌して書いて見よう

(中略)

■車先▲松王、弥▲梅王、静▲桜丸、淀▲虎王、越代▲時平、菅▲糸、寛治郎「鳥の籠の巢に放れ」より「睨んで左右へ」迄皆相当に演じ別段非難もなかった、独り菅の時平は声で満場を圧して居た、之れが此の太夫の価値なりとの評も有った道具は甚だ手軽くて善いとは衆評の一致する所なりし■茶筌酒（駒、吉五郎）総評は悪き方では無いがこせこせとして面白からずと云う評もあつた「おぢやらしまするぢやなんよゑ」尻口消えて聞取難し■喧嘩場（鋳、一弥）声に癖は有れど達者に語つた■桜丸切腹（津、友治郎）「年は寄つても怖い親」より、何所へ聞きに往ても気の毒な程評が悪い、中にはぜろだ素人でももっと善いのが有る杯の語を聞く、爰に杖共柱共頼むは、熱心に語る丈けが取柄と云うた人が有る、浄瑠璃は汗を流して語るものとの誤解を説いてやりたいと云う者もあつた、評者の聞いた時も大分屑を出した、夫は斯うじゃ「さらばおらもぎつとして」濁つたが是はぎと清音である「ヤイ馬鹿者」手緩し「尤も善悪き別なく」此きはしゃがよい「親王様の御あく名」あはなと訛るもので有る「一寸延しに命を庇ひ」茲はいのつとと詰るが原則である「神明のテ加護に任さんと」杖を突く「信を取て御蘭の立願」をはの「拍子乱れて南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」大夫の拍子が乱れた「無常の桜」拍手あり、段未迄熱心に語つて居たが何分息が短く大夫としては零で有る■御祝儀寿三番叟、引抜き夫婦春駒に万歳、干支に因て出度尽し▲越路、津、伊達、古靱▲吉兵衛、寛治郎、吉三郎、勝市、吉雄、正面は能舞台の道具▲翁、玉蔵▲千歳、文三▲三番叟、文五郎、栄三の兩人にて、大頭株が並び場面緊張して、道が浪花名物文楽座なりとお誓申すより外は何も愚図愚図と云う点は毫もない、総て斯うありたい二人の三番叟が踊り狂い終ると、引抜き舞台の正面を引上ぐれば歌舞伎の出囃しと云う格で▲叶、源、鋳、鶴尾▲清六、叶、芳之助、浅造、猿太郎▲文三、栄三の春駒▲玉蔵、文五郎の万歳▲御座附の味噌汁の後へ、澄ましの吸物と云う取合、評者も舌鼓を打つた■筑紫配所（古靱、吉弥）是迄も持役して経験ある場なるが今回非いと云うのと可いと云うのと二説ありしも要するに誓る人が多かつた、非常な皮肉家もあれば皆目知らぬ素人もあるから、多数決には行かぬが無論上の部に入れて差支なし、吉弥の糸は不相変よき受けて有つた■天拜山（叶、叶）かなう叶うで縁起は良いが、配所が出ると、此場は抜殻

の様で褒もせざれば不足も云わぬ、相撲なればまず二ツ■寺入（駒、燕四）粒椎茸は喧しい場で、五世春太夫は奥を食うたと口牌に残って居る、其慶事を今の大夫に望むと頭が陳いと笑われるから棚上げとするも、情なくて評されず■首実験御大（越路、吉兵衛）「どりやこちの子」より某曰く、慎重に構え能く語っては居るが、面白いからモ一度聞こうと云う気が出ない、道明寺の弥大夫と四段目の越路と此の兩名の名前を除き、無地にして場を取変たらばより以上面白い事が聞れるかも知れぬと如何にも責任が重いから慎重の態度を取って居る、随って芸がくすんで今一ツ発展せざるは又止むを得ざる次第なり、何に！聞所は道明寺と四段目だと、十把一絡げに云えばそれでお仕舞じゃが、大体今の大夫には出発点も到着点もなく、浮々と其日を送って居る、就中多少見込ある者と雖も、唯輪廓が出来れば能事了れりとして外題の内容には一向頓着せぬから殆んど何等の興味を与えぬのであるが、越路大夫は現代の代表者なれば、斯道のため献身的に模範を示して貰いたいものじゃ「玉簾の中の誕生」より憂いを含んだから「所詮御運の未なるか」の憂いが引立たぬ、後の松王は牛飼舎人で語らねばならぬに、品位が有り過ぎて舎人に受取れず、泣笑いは十分腹を見せて上乘「健気な八つや九つで」渡り具合旨し、仮名送りは天性の細き声に合て結構、亦「跡は門火にゑいもせず」ひをいと語りしは流石なり、人形は「五色の息を一時に」で源蔵が戸浪に抱付しきしは面白からず、夫から松王が「御夫婦の手前も有るわい」と千代を叱り付「イヤ何源蔵殿」と改まる所にて千代が間に居るから退けと顔で命ずるも意地張て動かぬから扇で敷居を打てきめ付ると、猿の怒りたる時齒を剥き出してする如くイーをして豊障り荒々敷退くは、長家囁の所作にて、千代の性格に反したる料なれば悪し